

浅川扇状地遺跡群

迎田遺跡(2)

—(仮称)東邦デュアタウン若槻東条分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2022年3月

長野市教育委員会

浅川扇状地遺跡群

迎田遺跡(2)

—(仮称)東邦ピュアタウン若槻東条分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2022年3月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第164集として刊行いたします本書は、(仮称)東邦ビュアタウン若槻東条分譲地造成工事に伴って実施した、浅川扇状地遺跡群に属する迎田遺跡に関する調査報告書であります。

発掘調査では、奈良時代から平安時代にかけて埋没した谷跡を検出し、出土した弥生時代～平安時代の土器から、周辺に分布する未確認の集落に関する手がかりを得ることができました。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様方に厚く御礼申し上げます。



令和4年3月

長野市教育委員会
教育長 丸山 陽一

例言

- 1 本書は、「(仮称) 東邦ビュアタウン若槻東条分譲地造成工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、東邦商事株式会社 代表取締役 増子圭介 と、長野市長 加藤久雄（～令和3年11月10日）・荻原健司（令和3年11月11日～）との間で締結された「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター担当）が実施した。
- 3 調査地は、長野県長野市大字若槻東条字迎田550-1外に所在する。調査面積は757㎡である。
- 4 発掘調査は、令和2年4月6日～令和2年5月15日に実施した。また、整理調査および報告書刊行にいたる業務は、調査終了後から令和3年度にかけて行った。
- 5 本書の編集・執筆は清水竜太が担当した。
- 6 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター所管）で保管している。なお、本調査の略記号は「AMTP」である。

凡例

- 1 本書では、検出された遺構のうちで時期・性格等が明らかなものを中心に報告した。
- 2 遺構図の方位は座標北を表している。
- 3 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ区（東経138°30'00"、北緯36°00'00"）の座標値（日本測地系2011）と、日本水準原点の標高を基準とした。
- 4 遺構実測図は、1/20で作成した原図をもとに作成した。
- 5 遺物実測図は、原寸で作成した原図をもとに土器1/4・土器断面1/3で掲載した。
- 6 遺構写真・遺物写真の縮尺は任意である。
- 7 土器実測図において、断面黒塗りは須恵器を表す。また、器面のは赤色塗彩、は黒色処理の範囲を表す。

目次

第I章 調査の経緯	1	第3節 迎田遺跡一次調査の概要	7
第1節 調査の契機と事務経過	1	第III章 調査成果	8
第2節 調査の経過と方法	1	第1節 調査の概要	8
第3節 調査体制	4	第2節 遺構と遺物	8
第II章 遺跡の立地と環境	5	第IV章 まとめ	12
第1節 遺跡の立地	5	写真図版	
第2節 周辺の遺跡	5	報告書抄録	
図1 調査地位置図	2	【挿図目次】	
図2 迎田遺跡調査地点位置図	3	図6 遺構配置図	8
図3 調査範囲図	3	図7 調査区壁面土層断面図	9
図4 周辺遺跡位置図	6	図8 出土遺物実測図	10
図5 一次調査地点調査区配置図	7	図9 迎田遺跡周辺の微地形と調査区	12
表1 土器観察表	11	【表目次】	

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査の契機と事務経過

調査地は長野市北部の若槻地区に所在する（図 1）。若槻地区は、かつては旧北国街道沿いを中心に集落が広がる農山村であったが、1970 年代から 1990 年代にかけて県道長野荒瀬原線や都市計画道路北部幹線などの整備が進み、現在は宅地化・商業地化が著しい地域となっている。

こうした中、住宅街に囲まれた県道沿いの休耕田に総事業面積 2,934.7㎡の宅地造成事業が計画された。平成 30 年 5 月 15 日、これに係る埋蔵文化財包蔵地の照会が事業主体者から長野市埋蔵文化財センターにあり、照会地が浅川扇状地遺跡群の範囲内にあり、昭和 57 年に迎田遺跡で行われた発掘調査（以下、一次調査）の調査地から約 200m 南東に位置することから（図 2）、埋蔵文化財の保護に関する手続きが必要となる旨を伝えた。その後、同年 12 月 19 日付で文化財保護法第 93 条の規定に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」を受理し、平成 31 年 1 月 8 日付 30 埋第 2 - 242 号にて「発掘調査」の保護措置を指示した。

試掘調査は同年 2 月 13 日に実施し、北西から南東に延びる事業地の北西・中央・南東の 3 箇所に試掘坑を設定した。この結果、北西では地表下 77cm、中央では同 40cm、南東では同 30cm・95cm でそれぞれ遺物包含層を確認し、3 月 27 日付 30 埋第 5 - 25 号にて事業主体者に通知した。この後、本開発事業に関わる埋蔵文化財の保護協議を進め、①切土造成される中央～南東 9 区画分の宅地、開発道路、市道の拡張部分を合わせた約 2,227㎡を対象に記録保存を目的とした発掘調査を実施すること、②各遺物包含層に対応する 2 面の遺構検出面（以下、一次面・二次面）を設定すること、③上位の遺物包含層まで造成面が達しない中央 6 区画分の宅地は二次面を現状保存することの諸点で合意した。なお次節で述べるように、調査過程で得られた所見に基づき発掘調査対象区域の見直しを行い、調査面積は最終的に 757㎡まで減少している（図 3）。

その後、令和 2 年 4 月 3 日付で長野市教育委員会教育長との間に「埋蔵文化財の保護に関する協定書」、4 月 6 日付で長野市長との間に「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し、現地における発掘調査を 4 月 6 日から 5 月 15 日まで 40 日間実施した。翌令和 3 年 2 月 26 日には変更契約を締結し、その後 3 月 2 日付で当該年度分の業務を完了して実績報告書を提出した。発掘調査報告書作成のための整理作業は令和 3 年度に実施し、令和 4 年 3 月に本書を刊行してすべての保護措置を終了した。

第 2 節 調査の経過と方法

調査の最初の工程となる一次面の表土掘削は、本体工事の一環として、発掘調査委託契約の締結に先立つ 4 月 1 日から開始した。試掘調査結果との整合を図るため、二枚の遺物包含層が確認された事業地の南東から掘削を始めたところ、遺構や遺物はおろか炭化物さえ認められず、上位の遺物包含層の認定に誤りがあったことが判明した。そのため、当初計画で一次面までの調査とした中央の宅地は調査対象区域から除外し、翌 2 日からは開発道路西端からの掘削作業に移った。4 月 13 日には発掘作業員の雇用を開始し、残りの表土掘削と併行しながら、既掘範囲の壁面清掃と遺構検出を 4 月 23 日まで実施した。この結果、調査区の大部分が自然地形である谷跡の範囲内に位置し、居住遺構の検出が見込めないことが予想されるところとなり、その時点で表土掘削に及んでいなかった事業地南東部を調査対象区域から除外することとした。これ以降は谷跡の範囲と埋没時期の特定に主眼をおいて掘削範囲を限定した調査を行い、5 月 13 日には現地における作業を終了した。

調査記録のうち遺構測量は、株式会社写真測図研究所に委託した。記録写真は、35mm判フィルム一眼レフカメラを使用してモノクロネガフィルムおよびカラースライドフィルムで撮影し、APS-Cサイズデジタル一眼レフカメラを補助的に併用した。また、ドローンを援用した空中撮影を5月12日に実施した。

整理作業については、出土土器の洗浄・注記・接合を現地作業終了後の7月に実施し、令和3年度に遺物実測・図面整理・報告書編集を順次進め、令和4年3月31日の本書の刊行をもってすべての作業を終了した。



図1 調査地位置図

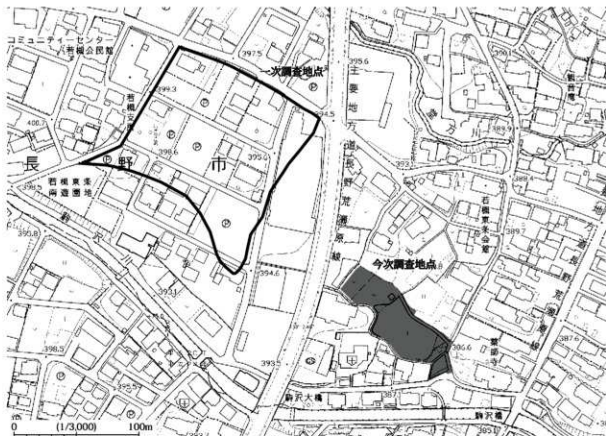


図2 迎田遺跡調査地点位置図

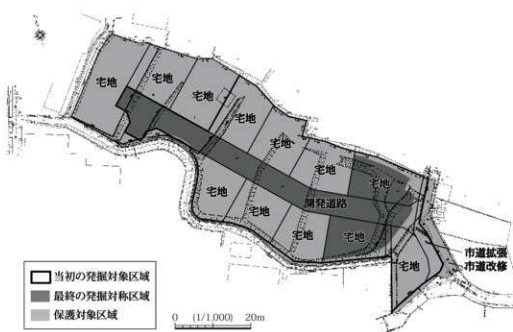


図3 調査範囲図

第3節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として長野市埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤 守（令和2年度） 丸山 陽一（令和3年度）
総括責任者	長野市教育委員会	教育次長	樋口 圭一
総括管理者	長野市教育委員会文化財課	課長	小柳 仁彦（令和2年度） 前島 卓（令和3年度）
調査責任者	長野市埋蔵文化財センター	所長	大井 久幸
調査担当者	長野市教育委員会文化財課（埋蔵文化財センター担当）	課長補佐	飯島 哲也 課長補佐 風間 栄一（令和3年度）
調査機関	長野市埋蔵文化財センター		
	庶務担当	係長	小林 晴和（令和2年度）
		事務職員	宮本 博夫、平林満美子
	調査担当	係長	風間 栄一（令和2年度）
		主事	小林 和子
		研究員	清水 竜太（主任調査員） 篠井ちひろ（調査員） 千野 浩（令和3年度）、田中 曉徳 遠藤恵実子（令和2年度）、井出 靖夫 小野 涼香（令和2年度） 伊藤 愛（令和2年度）
発掘調査員	向山 純子		
発掘補助員	後藤 大地		
発掘作業員	青山三枝子、岩瀬 佳範、内田 正征、大谷 盛孝、岡沢 貴子 大日方 孝、金子ボンティブ、駒澤 一雄、杉本 千代、田原 次郎 中村 泰明、峯村 茂治、峯山真由美、宮尾 弘子、宮本 正守 向山 久、渡辺 由美		
整理調査員	青木 善子、市川ちず子、鳥羽 徳子、半田 純子、武藤 信子		
整理作業員	飯島 早苗、清水さゆり、西尾 千枝、待井かおる、宮島 恵子 三好 明子		
遺構測量委託	株式会社写真測図研究所		
重機等現物提供	東邦商事株式会社（本体工事請負業者：株式会社北條組）		

第二章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

迎田遺跡が所在する長野市は、飯縄山・戸隠山・黒姫山などの北信五岳を背負う長野県北部に位置し、千曲川の下流に広がる長野盆地の大半と、西側の西部山地、東側の東部山地に市域を有する。市内には1,116箇所の遺跡があり（令和4年3月現在）、本遺跡を含む大多数の遺跡は長野盆地に立地する。

古くから善光寺平と呼ばれる長野盆地は、千曲川と犀川の合流地点を中心にひらけた中央高地内陸部を代表する盆地である。長さ約35km、幅約10kmの南西—北東方向に延びる紡錘形を呈し、南端の千曲市稲荷山付近で標高360m、北端の中野市延徳で同330mと、きわめて平坦な地形をなしている。盆地床を構成するのは、中央を北流する千曲川の氾濫原と、東西の山地から流下する河川の扇状地であり、大半を後者が占める。本遺跡は、飯縄山に源を発する浅川が形成した扇状地上の遺跡を総称する「浅川扇状地遺跡群」を冠しているものの、地形上は浅川の北を流れる駒沢川の小規模扇状地に立地している。調査地周辺は、南を駒沢川、北を堂万川が扇状地を開析して流下し、北西から南東に長い台地状の地形を呈している。調査前の現況は7段の水田面からなる休耕地で、標高は386～390mである。

第2節 周辺の遺跡

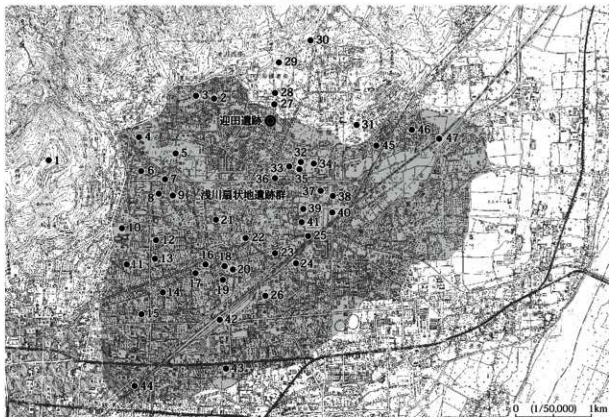
市内有数の遺跡密集地である浅川扇状地は、その全域が「浅川扇状地遺跡群」に登録され、これまで多くの発掘調査が行われている（図4）。本節では、浅川扇状地遺跡群およびその隣接地に所在する遺跡のうち代表的なものを時期ごとに概観していく。各遺跡の詳細な内容については、付表に示した報告書を参照されたい。

縄文時代の遺跡は、扇状地扇頂部から扇中部にあたる浅川地区・若槻地区・吉田地区の浅川沿いに点在している。松ノ木田遺跡（4）は、前期後葉・中期後葉・後期にわたるこの時代を代表する遺跡で、前期後葉には块状耳飾を転用した石製装身具類を生産していたと考えられている。

扇状地の本格的な開発は弥生時代に始まり、三輪地区や徳間・稲田地区など、扇状地両翼にも遺跡の分布域が拡大する。檀田遺跡（5）では、中期後半・後期後半の大規模な集落が検出された。中期後半の集落は、大半の住居跡が栗林式土器編年における最古段階に位置付けられ、同時期の浅川端遺跡（7）・牟礼バイパスD地点遺跡（30）に対する拠点的な集落であったと考えられる。また、礎床木棺墓を含む9基からなる木棺墓群が居住域に隣接して検出され、当時の集落構造の一端が明らかになった。後期後半においては在土器とともに多くの北陸系土器が出土した。同様の事象は本村東沖遺跡（10）・長野女子高校校庭遺跡（13）などでもみられ、北陸系土器の流入が本格化する弥生時代末に先んじる共伴事例として評価される。後期初頭吉田式土器の標式遺跡である吉田高校グランド遺跡（21）では、東北地方の天王山式土器の影響を受けた土器やアメリカ式石鏝が出土した。該期における東北地方との交流を示す数少ない遺物として注目される。なお扇頂部の本遺跡では中期初頭、扇端部の国鉄車両基地遺跡（42、笹澤1970）では中期前半と、長野市内では出土例の少ない時期の土器が見つまっている。

古墳時代になると、それまで遺跡の分布が希薄であった扇中部の桐原地区や扇端部の平林地区でも遺跡が認められるようになる。弥生時代末～前期の集落遺跡はいずれも検出住居数が少ないが、檀田遺跡・返目遺跡（17）・桐原宮北遺跡（18）・桐原牧野遺跡（19）・吉田古屋敷遺跡（23）・吉田四ツ屋遺跡（24）で方形周溝墓が見つまっている。中期の本村東沖遺跡は該期の拠点集落とみられ、石製模造品の製作工房を含む56軒の住居跡が検出さ

れたほか、多量の古式須恵器や子持勾玉・土鈴などの特殊な遺物が出土した。集落の存続期間から、地附山古墳群(1)の築造に直接関わった人々の居住域と考えられている。扇端部に位置する同じく中期の駒沢新町遺跡(45)は、5箇所の祭祀遺構が確認され、駒沢祭祀遺跡として一部が県史跡に指定されている。後期は、90軒の住居跡を検出した檀田遺跡を除けば、小規模な遺跡が点在している。湯谷東古墳群(6)は6世紀末頃に構築された7基の円墳からなる古墳群で、現在は2号墳のみが残されている。



No.	遺跡名称	種別	縄文	弥生	古	中	古	中	報告書番号	No.	遺跡名称	種別	縄文	弥生	古	中	古	中	報告書番号
	河田遺跡	集落跡	○	△	○			13		25	貝巴地遺跡	散布地	○	○	○				103
1	地附山古墳群(7基)	古墳						30		26	中越遺跡	集落跡	○	○	○	△			146・148
2	浅川西谷遺跡	集落跡				○		2		27	草刈イイイA地台遺跡	集落跡	○	○	○				12
3	小坂屋遺跡	集落跡				○		94		28	草刈イイイB地台遺跡	集落跡	○	○	○				17・65
4	松ノ木田遺跡	集落跡	○					77・82		29	草刈イイイC地台遺跡	集落跡	○	○	○				17
5	檀田遺跡	集落跡	○	○				41・105		30	草刈イイイD地台遺跡	集落跡	○	○	○				17
6	湯谷東古墳群(7基)	古墳						10		31	佛間本堂跡遺跡	集落跡	△	○	○				69・139
7	浅川端遺跡	集落跡	○	○	○			29・102・122		32	佛間善通遺跡	散布地	○	○	○				144・148
8	古宇木遺跡	散布地	○	○				161		33	佛間柳田遺跡	集落跡	○	○	○				99
9	押越遺跡	集落跡				○		41・136		34	佛間柳田遺跡	集落跡	○	○	○				9・47
10	本村東沖遺跡	集落跡	△	○				50・67・111		35	佛間中津遺跡	散布地	○	○	○				144
11	本村南沖遺跡	集落跡	○	○	○			集113		36	稲志遺跡	集落跡	○	○	○				47
12	下宇木遺跡	集落跡	○					38		37	本坂遺跡	集落跡	○	○	○				47
13	長野女子高校校庭遺跡	集落跡	○	○	△			134		38	二ツ宮遺跡	集落跡	○	○	○				47・71・122
14	三輪遺跡	集落跡	○					6・20・38・81・62・75・140・154		39	天神木遺跡	集落跡	△	△					104
15	本郷前遺跡	集落跡	○	○				103・150		40	権現堂遺跡	集落跡	○	○	○				104・108
16	朝原宮西遺跡	集落跡	○					108		41	福爪遺跡	集落跡	○	○	○				104
17	返日遺跡	集落跡	△	○				108		42	国鉄車両基地遺跡	散布地	△	△					
18	朝原宮北遺跡	集落跡	△	○				130		43	平林東沖遺跡	集落跡	○	○	○				116・138
19	朝原牧野遺跡	集落跡	○	○				143・145・159		44	東原町遺跡	散布地	○						集34
20	朝原安倉(高野式部跡)	城跡跡						145		45	駒沢新町遺跡	集落跡		○					10・55・126
21	吉田高野グランド子遺跡	集落跡						22・97		46	上長岡遺跡	集落跡			○				111
22	吉田町東遺跡	集落跡	△	△				71・112・126・152		47	駒沢城跡	城跡跡			○				76・127
23	吉田古屋敷遺跡	集落跡	○	○				84・108・118・119・120											
24	吉田四ツ屋遺跡	集落跡	○	○				75・160											

- ・ゴシック体で表記した遺跡は浅川扇状地遺跡群に含まない。
- ・○は遺構・遺物の確認、△は遺物のみの確認を示す。
- ・報告書番号のうち、「集」を冠したものは長野県埋蔵文化財センター発行の報告書を示す。

図4 周辺遺跡位置図

古代は扇状地全域で遺跡が確認され、特に扇状地北部の若槻地区、稲田・徳間地区、扇状部の桐原地区では比較的大きな規模の集落が形成される。特殊な遺物に、本堀遺跡(37)・牟礼バイパスC地点遺跡(29)・同D地点遺跡の7世紀代に遡る軒瓦や稲添遺跡(36)の平安時代の瓦塔など仏教関連遺物、桐原宮北遺跡の稜鏡・双耳杯・円面硯など官衙関連遺物がある。

中世は、各集落遺跡で見つかった遺構・遺物のほか、15箇所の城館跡が知られる。そのうち発掘調査が実施されたのは駒沢城跡(47)と桐原要害(高野氏館跡)(20)の2箇所で、それぞれ堀と考えられる溝状遺構や柵列・掘立柱建物などが検出されている。

第3節 迎田遺跡一次調査の概要

迎田遺跡は、若槻東条団体営非補助土地改良事業に伴う分布調査で発見され、昭和57年(1982)に発掘調査が行われた(長野市教育委員会1983)。調査対象地が12,000㎡と広大なため、10m間隔に設定したトレンチを適宜拡張するというのが当初の調査方針であった。しかし、最初に掘削したトレンチにおける遺物包含層の確認高が施工深度よりも深く、発掘による耕作への影響を抑えたい開発側の意向もあって、以降の調査は任意に設定した7箇所の試掘坑で行われた。また、施工深度が遺物包含層まで達する4号道・5号道については工事立会いとし、必要に応じて発掘調査を実施した(図5)。

見つかった遺構は、4号道の平安時代前期竪穴住居跡1軒だけである。また、トレンチ西端で弥生時代後期、試掘坑および工事立会いで弥生時代中期・古墳時代中期の土器を検出した。

限られた調査範囲のため遺跡の内容には不明な点が多いが、弥生時代中期～後期、古墳時代中期、平安時代の各遺構が存在し、土器の出土量の多い古墳時代中期に主体があるものと予想されている。また遺跡範囲については、調査地西側のコミュニティセンター付近を中心とした、駒沢川と堂万川に挟まれた一帯が想定されている。



図5 一次調査地点調査区配置図

参考文献

- 菅澤浩 1970 「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』第三期第23巻第12号、信濃史学会
 長野市誌編さん委員会 1997 『長野市誌 第1巻 自然編』、長野市
 長野市教育委員会 1983 『浅川扇状地遺跡群 迎田遺跡・川田条里の遺構・石川条里の遺構』長野市の埋蔵文化財第13集

第三章 調査成果

第1節 調査の概要

検出した遺構は、奈良～平安時代に埋没した谷跡と時期不明の小穴である(図6)。調査区の大部分を谷跡が占め、地山の検出範囲はわずかである。調査区C—C'壁面(図7)に代表させて本調査地の基本層序を示すと、上位から表土層・造成土層(1・3層)、水田層(4・5層)、自然堆積層(6・7層)、谷跡覆土層(8～11層)、地山層(12・13層)となる。谷跡は自然堆積層の下面で確認できるが、調査開始当初は谷跡の覆土最上層である8層を遺物包含層、9層上面を地山と認識して表土掘削を進めたため、遺構検出面は確認面よりも50cmほど低く設定された。なお、4・5層より出土した陶磁器から水田層の形成は江戸時代以降と考えられ、それ以前には自然堆積層を表土とする低地が周辺に広がっていたものと推測される。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器がある。遺構検出状況を踏まえれば、陶磁器を除くほとんどの土器は谷跡に帰属するものと考えてよいだろう。内寸53.4cm×33.4cm×6cmの取納箱で3箱と出土量は少ないが、後述するように谷跡の掘削範囲は非常に狭く、取り上げた土器は埋蔵量全体のごく一部に過ぎない。

第2節 遺構と遺物

谷跡 調査区のほぼ全域で検出された自然地形である。北西から南東に延びる溝状の落ち込みで、検出長は約80mを測り、両端は調査区外に続く。狭長な調査区のほとんどが落ち込みの範囲内に位置していることに加え、一部に大規模な覆乱を受けていることか

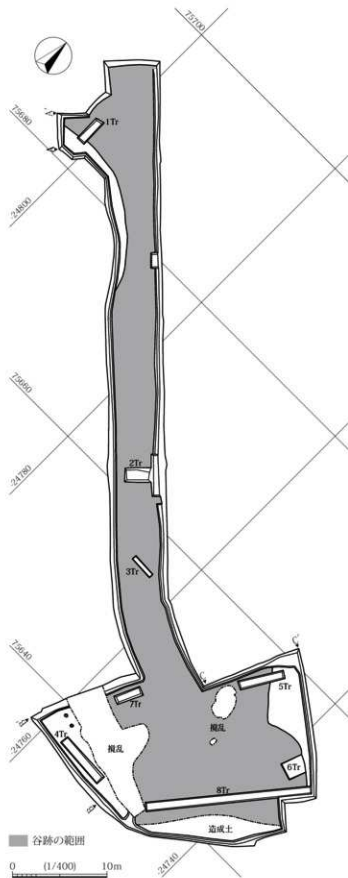
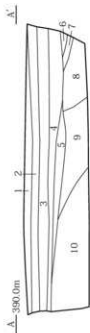
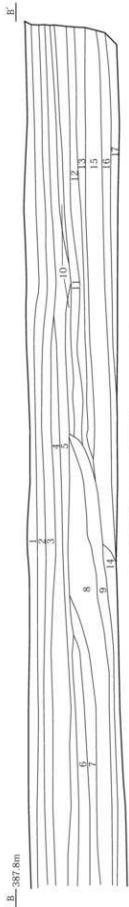


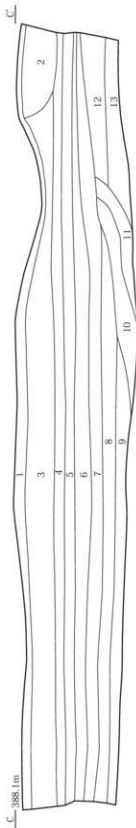
図6 遺構配置図



1. 表土
2. 褐色粘土 (10YR4/1, 水田層)
3. オリブ褐色粘土 (2.5Y4/3, 水田層)
4. オリブ褐色粘土 (5Y2/1)
5. オリブ褐色粘土 (5Y3/1, $\phi \sim 10\text{cm}$ の礫を多く含む)
6. オリブ褐色粘土 (7.5Y3/1, 土器を含む, 谷津覆土)
7. オリブ褐色粘土 (7.5Y3/1, 礫・土器を含む, 谷津覆土)
8. 黒褐色 (10YR2/2, 礫を含む, 地山)
9. 暗褐色粘土 (10YR2/3, 地山)
10. 黒褐色 (10YR2/2, 礫を多く含む, 地山)



1. 表土
2. 褐色粘土 (10YR4/1, 水田層)
3. オリブ褐色粘土 (2.5Y4/3, 水田層)
4. オリブ褐色粘土 (5Y3/1)
5. オリブ褐色粘土 (5Y3/1, $\phi \sim 10\text{cm}$ の礫を多く含む)
6. 黒褐色粘土 (7.5YR3/1, 谷津覆土)
7. オリブ褐色粘土 (5Y3/1, 谷津覆土)
8. 黒粘土 (10YR1/1, 谷津覆土)
9. 黒褐色粘土 (2.5Y3/2, 谷津覆土)
10. 暗褐色細砂 (2.5Y6/2, 地山)
11. 黒褐色 (2.5Y3/2, 地山)
12. 10に同じ
13. 11に同じ
14. 暗褐色細砂 (2.5Y4/2, 礫を多く含む, 地山)
15. 10に同じ
16. オリブ褐色細砂 (5Y3/1, 地山)
17. 10に同じ



1. 表土
2. 暗褐色 (10YR6/6, 造成土)
3. 黒褐色粘土 (7.5YR3/1, 造成土)
4. 褐色粘土 (10YR4/1, 水田層)
5. オリブ褐色粘土 (2.5Y4/3, 水田層)
6. オリブ褐色粘土 (5Y3/1)
7. オリブ褐色粘土 (5Y3/1, $\phi \sim 10\text{cm}$ の礫を多く含む)
8. 黒褐色粘土 (7.5YR3/1, 谷津覆土)
9. オリブ褐色粘土 (5Y3/1, 谷津覆土)
10. 黒粘土 (5Y2/1, 土器を含む, 谷津覆土)
11. 黒褐色粘土 (2.5Y4/1, 土器を含む, 谷津覆土)
12. 暗褐色 (10YR2/3, 礫を多く含む, 地山)
13. 黒褐色細砂 (2.5Y5/4, 地山)



図 7 調査区壁面土層断面図

ら、面的に確認できたのは南西肩の約18m（調査区西部）と、北東肩の約13m（調査区東部）だけであった。両肩を通して検出できた場所はないが、調査区B-B'壁面で覆土が確認できるので、調査区東部では30m程度の谷幅があるものと推定される。自然地形であることからトレンチによる部分的な掘削にとどめ、3箇所の調査区壁面および1・5・6・7・8トレンチにおいて、比較的緩やかな落ち込を確認した。また谷の中央寄りに設けた2トレンチでは、基本層序9層（以下、層番号のみ記載）の上面から約120cm下で底面を検出した。検出高から底面までの比高と、想定される谷幅を考え合わせれば、浅い皿形～椀形を呈する断面形が予想される。

覆土の堆積は、調査区壁面で最大4層を把握した。また、土層断面図は作成していないが、2トレンチの9層から下位では、グライ化した砂層と粘土層の互層を確認した。9層から下位は現在でも湧水が著しく、谷跡の内側は本来低湿地であったと推測される。グライ化層中には、奈良時代～平安時代前期を主体とする土器や自然木が高低による粗密な一定量含まれており、この時期に断続的な土砂の流入があったことが窺われる。

図8には、遺構検出や壁面精査の作業で取り上げたものも含め、谷跡に帰属すると判断される遺物を示した。

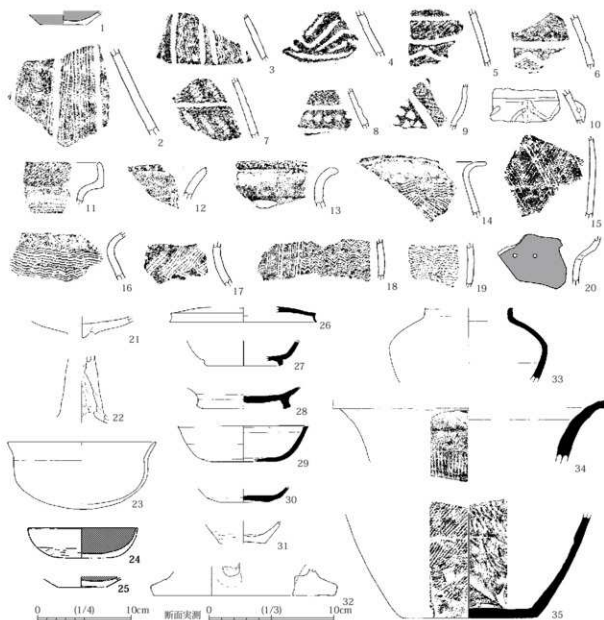


図8 出土遺物実測図

1～20は弥生土器である。いずれも中期後半の栗林式のもので、器面および破断面の摩耗が激しく、接合関係をもつものはほとんど認められない。21～23は土師器で、古墳時代中期前半に位置付けられる。該期の土器は他時期の土器に比べて相対的に出土量が少なかったが、鉢(23)の遺存率は比較的高い。谷跡の埋没時期を遡る以上二時期の土器は、調査区北東隅周辺で密に検出された。24・25・31・32は土師器、26～30、33～35は須恵器で、奈良時代～平安時代前期に位置付けられる。該期の土器は出土土器の主体をなし、谷跡の埋没時期を示すものと考えられる。

谷跡から出土した土器は基本的に周囲からの流れ込みと判断され、谷跡を挟む微高地上に未確認の居住域が存在することを示唆するものである。

小穴 調査区東側で近接する2基を確認した。地山を掘り込んでいるものの、位置的には谷跡の範囲内にあるのは確実である。出土遺物がなく、時期は不明である。

表1 土器観察表

・「遺存」は、図化範囲における残存率を分数で表記した。

・「色調」は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修「新版 標準土色帖」の色名を表記した。ただし「にぶい」は「に」と略した。

図 番号	陶 器 番号	遺域	層位	種別	器種	遺存	色調	成形・調整	文様・番号	取上	実測 番号
8	1	谷跡	彌土	弥生	鉢	4/5	灰白	外:赤彩ミガキ、内:赤彩ミガキ		8Tr	1
8	2	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に黄褐色	外:ハケ→ミガキ	割:懸垂文(懸垂下文→沈線文)	東壁	1
8	3	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に黄褐色		割:懸垂文(沈線文・懸垂状文)	8Tr	5
8	4	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に黄褐色		割:横走沈線文・重山形文	8Tr	19
8	5	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に黄褐色		割:横走沈線文・縄文・山形文	8Tr	18
8	6	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に黄褐色	外:ハケ→ミガキ	割:横走沈線文・縄文・山形文	6Tr	1
8	7	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に橙		割:横走沈線文・縹刺文	8Tr	10
8	8	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に橙		割:横走沈線文・縄文・押引列点文	8Tr	11
8	9	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に黄褐色		割:沈線文・押引列点文	8Tr	7
8	10	谷跡	彌土	弥生	壺	-	明褐色	赤彩ミガキ	割:横走沈線文・沈線文・穿孔付突起	8Tr	8
8	11	谷跡	彌土	弥生	壺	-	灰黄褐色		口縁:縄文、割:縹刺文	検出	3
8	12	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に橙		口縁:割目、割:懸垂下文→縹刺文	8Tr	3
8	13	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に黄褐色	口縁:横ナデ	口縁:縄文	8Tr	6
8	14	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に黄褐色	口縁:横ナデ	割:縹刺文、割:縹刺状文	8Tr	4
8	15	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に橙		割:斜格子文	8Tr	9
8	16	谷跡	彌土	弥生	壺	-	灰白	口縁:横ナデ	割:縹刺状文	東壁	2
8	17	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に黄褐色		割:縹刺状文	8Tr	20
8	18	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に橙	内:横ハケ	割:懸垂下文→縹刺状文	8Tr	17
8	19	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に黄褐色		割:縹刺状文、黒点	8Tr	19
8	20	谷跡	彌土	弥生	壺	-	に黄褐色	外:赤彩ミガキ	2孔1組穿縛孔	8Tr	2
8	21	谷跡	彌土	土師	高杯	1/1	橙	外:ミガキ		検出	4
8	22	谷跡	彌土	土師	高杯	1/2	に橙	脚柱外:縦ミガキ、脚柱内:粘土結核合痕・絞り目・ケズリ		8Tr	12
8	23	谷跡	彌土	土師	鉢	1/4	橙	外:縦→斜ミガキ、内:縦→斜ミガキ		8Tr	16
8	24	谷跡	彌土	土師	杯	1/3	黒	口:横ナデ、外:ケズリ、内:横ミガキ	内:黒色地埋	2Tr	6
8	25	谷跡	彌土	土師	杯	1/1	灰黄褐色	口:口成形、内:ミガキ、底:回転糸切り	内:黒色地埋	5Tr	1
8	26	谷跡	彌土	須恵	杯蓋	1/5	灰	口:口成形、外:回転ケズリ		2Tr	5
8	27	谷跡	彌土	須恵	有台杯	1/6	橙	口:口成形		東壁	1
8	28	谷跡	彌土	須恵	有台杯	1/1	に橙	口:口成形、底:回転ヘタ切り		2Tr	2
8	29	谷跡	彌土	須恵	無台杯	1/4	黄灰	口:口成形、底:回転ヘタ切り	内外:火跡	2Tr	4
8	30	谷跡	彌土	須恵	無台杯	1/1	灰黄褐色	口:口成形、底:回転糸切り		8Tr	14
8	31	谷跡	彌土	土師	壺	1/1	に橙	口:口成形、外:ケズリ、底:回転糸切り		2Tr	3
8	32	谷跡	彌土	土師	瓶	1/5	灰黄褐色	外:横ナデ	検用器穴1個所残	検出	1
8	33	谷跡	彌土	須恵	短頸壺	1/6	増灰	口:口成形		2Tr	1
8	34	谷跡	彌土	須恵	壺	1/5	灰	外:平行タタキ		検出	5
8	35	谷跡	彌土	須恵	壺	1/4	灰赤	外:平行タタキ、内:同心円白て具痕→平スリケシ、底:ナデ		黒色土	1

第IV章 まとめ

今回の調査では、調査区の大部分を自然地形の谷跡が占め、堅穴住居跡などの居住遺構は確認されなかった。低湿地であったと推測される奈良時代以前はもちろん、低地となった平安時代以降も、居住域としては適地ではなかったのだろう。谷跡の覆土中からは、奈良時代～平安時代を主体に、弥生時代中期・古墳時代中期の土器が出土した。周囲からの流れ込みとみられるこれらの土器は、その供給源となった居住域が近在していることを示唆するものと考えられる。周辺の大規模開発が始まる以前の起伏を留める昭和31年測量の地形図へ迎田遺跡の調査区を重ねたものを図9に示した。これをみると、今回の調査で確認した谷跡が等高線として明瞭に表れており、同時に谷跡の南北に延びる尾根状の微高地も確認できる。どの時期の遺構がどこにどの程度分布しているかは判断し難いが、この微高地上に各時期の居住域が展開している蓋然性はきわめて高いと考えられる。

ただ、ここで想定した居住域と一次調査地点周辺の居住域を一連のものとするのは難しそうである。と言うのも、一次調査にあった弥生時代中期初頭・同後期の土器が今次調査では見出せず、一次調査で主体をなす古墳時代中期の土器が今次調査で客体的な存在だった一方で、一次調査で判然としない奈良時代の土器が今次調査で多く確認されるなど、両調査地点における土器の出土傾向には大きな違いが認められる。また、両調査地点の間を通る県道の敷設に際して発掘調査が実施されておらず、この区間が無遺構空間であることも十分に予想されることである。駒沢川と堂万川に挟まれた台地状地形一帯を遺跡範囲とすることに変更を加えるものではないが、微地形で分別された存続期間の異なる居住域が併存している可能性が想定できる。

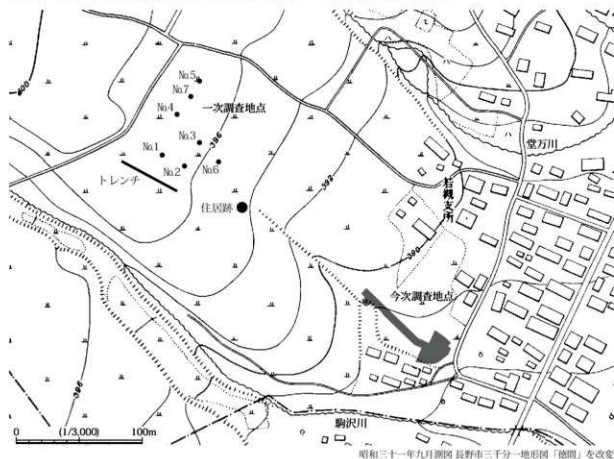


図9 迎田遺跡周辺の微地形と調査区



調査地遠景（空中写真、南東より）



調査区全景（空中写真、上が北東）

写真図版 2



谷跡南西屑（西より）



谷跡北東屑（北より）



調査区壁面 A-A' (北東より)



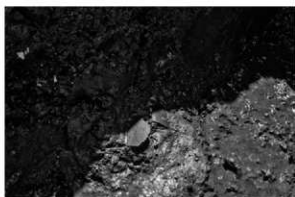
調査区壁面 B-B' (北より)



調査区壁面 C-C' (南東より)



2トレンチ (南東より)



2トレンチ遺物出土状況 (南東より)

写真図版 4



5トレンチ (南東より)



8トレンチ (南西より)



遺構検出 (4月21日)



遺構測量 (5月12日)



図 8 - 24



図 8 - 28



図 8 - 29



図 8 - 23



図 8 - 35

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん むかいだいせき 2
書名	浅川扇状地遺跡群 迎田遺跡（2）
副書名	（仮称）東邦ビュータウン若槻東条分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第 164 集
編者名	清水竜太
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒 381-2212 長野県長野市小島田町 1414 番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2022 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
浅川扇状地遺跡群 迎田遺跡	長野県長野市 大字若槻東条 字迎田 550-1 外	20201	A-094	36° 68° 16°	138° 22° 28°	20200406 ～ 20200515	757㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
迎田遺跡	集落跡	弥生時代中期		谷跡		弥生土器		
		古墳時代中期				土師器		
		奈良時代～平安時代				土師器・須恵器		
		時期不明		小穴 2 基				
要旨	迎田遺跡は、浅川支流の駒沢川が形成した小規模扇状地に立地する遺跡である。今回の調査では、奈良時代～平安時代に埋没した谷跡と時期不明の小穴 2 基を検出した。谷跡の覆土からは、奈良時代・平安時代の土器のほかにも弥生時代中期・古墳時代中期の土器が出土しており、谷跡を挟む微高地上に該期の居住域が展開するとの見通しを得ることができた。							

長野市の埋蔵文化財第164集

浅川扇状地遺跡群

迎田遺跡（2）

令和4年3月31日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 長野市埋蔵文化財センター
印刷 社会福祉法人ながのコロニー
長野福祉工場